文学・芸術・文化　15巻1号　2003.12

横田英夫試論

綱沢　満昭

農業、農村を重要視し、また、それを擁護しようとする思想の歴史は古い。農業生産がその国家、社会の経済的基盤となっている場合、時の為政者ならずとも、その国家、社会を構成する人間にとって、農の重視は極めて自然の感情といえよう。問題は、その基盤が揺らぎ始め、社会、国家の価値基準に異変が生じ、資本の論理が浮上し、確立し始めてゆく時、農を中核としていた諸々の価値を擁護・保守しようとして農本主義が台頭してくるということである。農を中核として完成されていた価値を破壊し、剥奪しようとするのに対し、農の思想は、防御の姿勢をとり、ある場合は鋭い牙をむく。防御、攻撃の手法はそれぞれの時代的状況に拘束され、さまざまな型をとることはいうまでもない。

日露戦争を契機として、日本は次第に農業国家から工業国家へ転換してゆくことになったが、この時期における農の保護的主張、あるいはポーズとしての農業重視の高唱、また、昭和恐慌期から第二次世界大戦にかけてのファナティックなものなど、その色合いはさまざまである。そして、農業人口は激減し、農業そのものが壊滅状態にある今日、農は「自然」、「環境」に置換され、それらを破壊してゆく文明への反動として、また、資本の論理貫徹がもたらす窮極の人間疎外に対し、人間性の復権を希求する足場としての村落共同体への郷愁などが、混然となって、農、土、環境、自然への関心は極度に高揚してきている。

これまでに登場した農本主義は、それぞれに特徴を持ってはいるが、それらを統合して共通したものをとりだせば、次のようなものとなるであろう。

(1)、農業生産、とくに稲作によるそれが、人間生存

の大本であり、それは天皇制国家の支柱となるものであるとの認識。

(2)、西欧的物質文明、機械文明、都市文明に対する激しい反対感情。

(3)、社会主義、共産主義に対する徹底的排除の姿勢。

(4)、農村内部の諸矛盾を隠蔽し、村落共同体を春風駘蕩する非政治的空間として把握する。

(5)、農村自治（社稷自治）を主張しながらも、それが決して反中央、反国家の思想にまで到達することなく、逆に、強力な中央集権的国家の形成に寄与することになる。

ここに取り上げようとする横田英夫（明治末期から大正にかけ、新進農政論家として活躍し、一次帰農して、土の生活を希求するが、その後、岐阜の地に赴き農民組合運動の指導者として最期をとげた。）は、これらの基本的特徴のいくつかを持ち合せながらも、農本主義者としては、極めて異色の存在であった。それはひときわ目立つ農民組合運動の指導者としての顔である。

阿鼻叫喚的農村の窮状に同情し、農村、農民的国家のために、国家革新の火ぶたを切ろうとした人物はいるが、横田の場合、そういう政治運動ではなく、岐阜県での中部日本農民組合の長としての活躍である。

本稿では、彼の著作に見られる農政思想の解明と、農民組合運動における彼の役割と実績を検討し、思想と運動との微妙な問題に触れてみたいと考える。

一、天皇制国家の尊重と農本主義

横田英夫は、まぎれもなく、尊皇愛国主義者であった。中部日本農民組合の基本的理念としても、そのことを強力に唄っているほどである。彼の著作の随所に見られる愛国、憂国の情と農村、農民とのかかわりのいくつかを拾っておこう。

「愛国的観念を中枢とした剛直なる精神は、実に農村によって養はれたのである。長久二千年の歴史を辱しめざりし偉大なる国民的元気は、実に斯くの如き農民の集合した農村から煥発したのである。観よ吾が国光の煥発、吾が国威の宣揚、一として農民の興らざるはなく、吾が国体の精華、吾が国民の光栄、一として農民の荷はざるものはないではない乎。吾が二千年の歴史は皇室を中心としたる一大家族である。而して農

民は実に此の光輝ある歴史の創造者である。(1)」
いま一つあげておこう。
「吾人は唯一言にして悉す。此愛国的精神の涵養地は、健全なる中堅として国脈を支へ来りし農村なり。其護持者は農村の維持者たる農民なり。換言すれば、農村は実に愛国的精神の涵養地にして、農民は実に其護持者たり、権化者たり。(2)」
いついかなる場合も、農民、農村は愛国の基盤となるもので、皇室を中心とした日本は常にこのようにしてあったという。この愛国的精神は、横田の堅い信念であり、彼の生涯にあって変わることはなかった。したがって、農の繁栄は国家の繁栄光輝であり、逆に農の衰退は国家の衰退となる。豊葦原の瑞穂の国日本は、農をもってその本質となし、天皇制国家そのものである。皇室の悠久の歴史こそ、日本の誇りとするものである。
この農を中核とする生産中心的健全文明に対し、私欲、消費、終争の渦巻く都市の商工業文明を横田は唾棄する。都市は農村の生き血を吸う吸血鬼で農村搾取の上に咲く徒花である。虚偽、腐敗、堕落、強奪、殺人の場が都市で、そこには倫理、道徳、人情、信頼のかけらもないという。「高工業の発達する所には蜂の密に集ふように不健全な人間が増加する。否商工業其のものが或る意味に於て人間を不健全化して居る。(3)」と、辛辣な商工業批判を行う。また農村をこよなく讃美し、都市に対しては次のような暴言も辞さない。
「都合は人間と人間の戦ふ陋巷で、農村は自然が人間を陶冶する楽土である。都合の闘は人間の醜き小我を露はす排済が行はれ、農村の闘は平和に対して厳粛制裁ありて慈撫ある大自然の威力に対し、人間の不断の努力が現はれる。都会は人間を惨虐ならしめ、冷酷ならしめ、卑怯ならしめ、自己的ならしめる。(4)」
この都会と農村を対立させ、農村内部の諸矛盾を隠蔽しようとするのは、多くの農本主義者が共通して力説するところであって、横田だけのものではない。明治二十七年から大正十一年まで東京帝国大学農科大学教授を努めた横井時敬なども、同様の認識、見解を持っていた(5)。ともかく農業は、商工業と違い、立国の基盤で、金銭追求の世界からは遠く離れたところに、その存在理由を持っている。都会は革命の製造所であるのに対し、農村は反革命、自然的社会秩序維持が行き

渡っている非政治的空間であるという。
農業は人間生存のための基本的食糧を供給するものであるが、農村は健全な国民を生産する場で、愛国、憂国の精神を醸成する場だと横田はいう。その国家の根幹となるべき農村の現状は如何。横田は農村の現実を次のように分析する。

二、変容する農村への眼

農を大本とする農本立国日本の現状はどうか。横田は窮乏化の極限を日本農村に見る。彼は詳細な統計数字を披瀝し、地方長官ともよく面談し、意見を聴取している。農民の日常的心情によく通じているはずの地方在住の長官にしても、その農村疲蔽の実態認識度には、寒心を抱かざるを得ないという。
論壇を席巻する評論家たちも、その多くは問題の本質の究明もなく、危機と救済を絶叫しているにすぎない。
「今や天下の人を挙げて農村問題を口にす。然り唯口にするのみ。真に口にするのみ。…（略）…彼の春陽の日を鶯が梅枝に囀づり、秋風の夕を鴉が老樹に騒ぐと何の選ぶ所ぞ。そこに何等の熱情なく、そこに何等の誠実なし。由来誠意なき喉頭三寸の議論は、百千人を合するも何等の力なきことは、言論の威力を経験したる者の普ねく知る所なり。[6]」
横田はこの不満は、彼の論壇デビュー作である「東北虐待論[7]」においても、すでに強説していたところである。
もはや、人間の生活とはいえぬような日常性のなかで呻吟する農民が、どうしてよく光輝ある伝統の国、日本国家を支えきれようか。農民はいまや、亡国の民と化している。横田は悲痛な声をあげる。
「噫、亡国の民を観んと欲せば、乞ふ去って農村に往け。薄暗き手洋燈の影に煤煙を避けつつ喪心枯衰、壮令にして恰も死影の如く腕組める男と、毛髪慌らず、泣き叫ぶ三、四児を擁して痩顔裹頬、夫の顔に生気なく、血色なく、希望なき惨ましき面影を見ることを得む。之れ亡国の民なり。面して之れ実に農民なり。[8]」
こういった窮状のなかにある農村において、とくに中軸となり、国家の支柱とならねばならぬ「自作農」の没落は、国家最大の憂事だと横田は考える。「自作農」没落の趨勢は、国家滅亡の前兆以外のなにもので

もない。横田の心中をとらえて離さぬものは、まさしくこの「自作農」中心の理想的空間であった。

「吾人が自作農階級の滅亡を目して、直ちに農村滅亡と嘆じたのは実に之に因るもの、新しき農村の如何なるものかを実見せざる吾人は、農村と云へば必ず健全なる自作農家の集合したるものと信じたればなり。[9]」

「自作農」が雪崩をうって滅亡してゆくことは農業、農村を大本とする瑞穂国家の一大有事ではあるが、しかしこの勢いは燎原の火の如きもので、誰れも止めることは出来ない。悲鳴や焦燥は要らぬ、この現実を直視せよ、と横田はいう。

この「自作農」の没落、崩壊は、新たな農村の姿を誕生させる。つまり、「自作農制度」は消え、「小作制度」がはびこる。これを横田は農村革命の第一段階、つまり第一過程と呼ぶ。第一過程を彼は次のように説明している。

「所謂農村革命の第一過程なるものは、自作農制度に代ふるに小作農制度を以てし、革命後に於ける農村の中堅は小作農階級に移れり。然らば此小作農制度とは果して如何なるものなる乎。革命されんとする新農村を想像せんと欲せば、先づ第一に之を研究せざる可らず。[10]」

やがて日本の農村は、このように「地主」と「小作農」という二つの極に分解するというのである。横田の心中には、土への愛着こそが、忠君愛国の心情を生み出し、光輝ある日本を担うはずのものであるとの強い思いがあった。土をこよなく愛し、それを基盤として氏神が生れ、村落共同体への愛情が醸成されてくる。しかもそれは連綿たる様相を呈する。この土への愛が郷土愛を生み、さらに国家への愛に延長し、拡大してゆくというのだ。

土への執着と愛国の情とのかかわりを横田はこういうのである。

「按ずるに吾国民の愛国的精神の根源は、勿論太古建国の鴻業を完成せる神族的意味にあるべしと雖ども、之れを顕発して愈々民性に植えたるものは、実に是れ吾が国なり是れ吾が土地なりと云ふ所有の観念に出発したる土着的感情に外ならず。此の〝神子の創造せる地は即ち吾が地なり、此の所有者は即ち吾なり〟と云ふ愛地的観念は、同時に同胞的結合を堅くせしめて、土地を愛し、土地を譲ることを誓はしめ、永く努

力懸念せしむるは当然にして、即ち国家を形造りて愛国的精神となれるものにあらずや。[11]」

「自作農」層が耕作する土地こそ、日本国家の伝統を護持するもので、このことは建国以来の不断の義務でなければならぬ。土は穀物を生み、愛国の精神を生む。横田の信念はここにある。

地主がいて、「自作農」がいて、「小作農」がいるという農村の姿は、やがて「大地主」と「小作農」という二極化現象を横田は農村革命の第一過程と呼んだのであるが、彼の農村革命はこれで終止符を打つのではなく、更に第二過程が待っていた。「大地主」層はやがて土地資本家という存在になり、「小作農」は農業労働者になるというのだ。つまり、資本家と労働者に類似した関係が生まれるというのである。横田の認識と予見の甘さが露呈してはいるが、彼の予見の内容をここに紹介しておこう。

横田によれば、「地主層」と「小作農」という関係は崩壊し、「農場制度」というものが生誕するという。その根拠はこうだという。

「地主と小作人とが所謂不利の衝突に苦しめられたる際、小作農民は小作するよりは寧ろ労銀を得る労働者の安全確実なるを思ひ、地主も亦小作に出すより農業労働者を傭うて自作するに如かずと感じたりとせば、之れ両者自ら望む所に走るもの、而して其の走り着きたる点は、雇れんとする労働者と傭はんとする地主との邂逅となり、茲に小作農民は欲する所の農業労働者たり、地主も亦志す所の自作農、或ひは農場所有者たることを得ればなり。[12]」

この段階で、横田の描いた農村革命は一応終結することになる。その後の農村はどうなるか、それは、「巨大なる土地資本家と蟻の如く群がる農業労働者によって埋められむ。[13]」ものとなるという。このことの正否、喜悲は不明だとする。

三、帰農の唄

明治四十四年、若干二十一歳の横田は、「東京朝日新聞」に、「東北虐待論」を連載し、また、翌年にも同じ新聞に「農村滅亡論」を掲載して新進気鋭の農政評論家としてデビューしたのである。この二つの連載をはじめとして次々と著作を公にしていった。大正三年には、『農村革命論』と『農村救済論』、大正四年には『日本農村論』、大正五年には『農村改革策』といった

具合である。

若くして評論家の地位を確立したかに見えた横田に異変が生じた。彼はこの文筆活動をやめ、突如として福島県耶麻郡熱塩村に帰農したのである。複雑な心理的葛藤があったに違いない。帰農を決意した動機を含めて、彼は「読売新聞」に、大正六年七月十七日から、同年十一月十三日という長期間、「農に帰らんとして」の連載の機会を得ている。この「農に帰らんとして」には、これまでの著作と違って、横田の農を中心とする哲学、思想的色彩が極めて濃く表出し、土への回帰、農への回帰が高唱されているように思える。つまり、彼の内部生命への傾斜がよく表現されている。

周知の通り近代日本の多くの知識人が帰農の唱を唄った。彼らは大都市の空虚な絢爛さや汚濁に満ちた空気に疲れ、また、己の極限的苦悩の解消からはほど遠いヨーロッパ的近代知に絶望し、原初的生命の息吹を求め、またそこに癒されんことを願いつつ土への回帰を企て、寸時の恍惚感に酔ったのである。土着的アナーキストもいれば、ロマン主義者も、国家革新の夢を追う人もいた。トルストイ、クロポトキンらの名が飛びかった。

横田の帰農の動機を見ておこう。

「私は何故に帰農を決行せるか。一言にして之れを尽せば、私は何等累せられず、侵されず、静に、深く、私の会心する真実の生活を歩まんが為である。唯、之れだけの願からである。唯、之れだけの願であるが、私に取っては此の願は、世界の如何なるものとも交換することの出来ないほど尊い、且つ大なる願である。若し此の大願にして成就するならば、私は、私の有する一切のものを代償しても惜しくない。(14)」

ここには横田のこの時点での決意の中核となるものが、よく表明されている。彼はこの決断を己の「生活革命」と呼ぶ。

農村問題を貧富、つまり経済問題だけに限定して論ずる手法によっては、解決し得ない人生問題が横田の胸中に、飛び込んできたのである。帰農のためなら一切を放擲してもいいとまでいうのである。己のこれまでの人生を無為の二十九年といって彼ははばからない。

どれほどの資産を持つか。どれほどの稼ぎがあるか、といった問いを排し、そもそも人間のあるべき姿とはなにかを問わずして、なんの人間ぞ、といった具

合である。いかに多く持つかを、どれほど問いかけ、解明に向けて奔走しても、それは所詮、資本主義経済のなかにおける量的問題でしかない。たしかに、経済的疲弊は、生命維持にとって決定的問題ではある。国家の支柱たるべき農民の経済生活が破滅的状況である時は、その国家の将来などはないということにもなる。

もちろん横田がそのことに無関心でいたわけではないし、それはそれまでの著作によって明らかに証明されている。しかし、そのことの重大さを知りつつも、そのことによっては、救済されぬもの、解決不可能なもの、つまり魂の問題を横田は発見したのである。

いわゆる所得獲得ということは、生きることの手段ではあっても、そのことに人生の目的があるわけではないと、横田は次のようにのべている。

「私が農民の生活によって感発されたことは、人間としての真実の生活は、『如何に持つべきか』と云ふ志向を正すことを順序として、始めて恪り得ると云ふことであった。『如何に持つべきか』と云ふ思慮も無用ではないが、所詮、夫れは生活の目的を指定すべきものではない。生活の目的は必ず『如何に在るべきか』と云ふ思慮の指揮を受けれなければならぬ。『如何に在るべきか』を問うことは、貧困に対する許しがたき暴言ではある。清貧に甘んじてこそ「良民」だなどという発想を無条件に許してはならない。農の世界は、排金主義、利害打算で生きる世界とは次元が違う、という声も、そう簡単に許してはならない。(15)」

「食えぬ」という現実を無視して、「如何に在るべきか」を問うことは、貧困に対する許しがたき暴言ではある。

このことを知的には知り抜いていた横田が農の特権をいうのである。彼が農民から学んだ最高のものは、土に執着する人間の「特権」ということであった。土着して生きる人間の人生には、他の職業では味えない充実したものがあり、それを極度に憧憬し、帰農を決意したというのだ。土地制度の矛盾、貧困はどこへいったのか。従来の著作からは大きくかけ離れた発言に終始することになる。

横田は、「資本主義拒否」を宣言する。資本主義経済のなかで生息している人間が、それを拒否するとは、いかなる謂か。そのことの現実的不可能性を横田が知らぬではない。しかし、貧の発生根拠から遠ざかり、それを回避して生きることを彼は主張しているのである。

「私共が貧から脱れる途は何かと云ふに、其の唯一の途は、私共自身が、自身の生活を、貧の発生する原因から遠ざけることである。一層明瞭に云へば、私共は其の思想と生活とに於て、資本主義を拒否し回避することである。[16]」

横田は心の問題、精神の問題をいっているのである。資本主義経済によって腐蝕してしまった精神、つまり拝金主義的心理を叩き直し、道徳的生活改善を断行するところに帰農という現実があるとする。

「私の生活の改造が、私の道徳的完成にのみ依って遂げ得るを信ずる私は、貧を脱れる唯一の途として、正しい生活を営む唯一の途として農に帰らんとするのである。[17]」

人は人を騙し、裏切るが、土は人に対し、一方で激甚なる拘束と戒めを与えはするが、決して裏切ることはしないし、略奪もしない。一定の労働投下に対し、条件が整えば等価値でもって反応してくれる。そこに、いささかの過不足もない。同じ貧でも、搾取された結果としての貧と、土を耕やした結果としての貧との間には、千里の径庭があるという。

「思へ、土は断じて人間の掠奪を許さない。求むるものに求めただけのものを与へる。…（略）…土は決して人間から何物をも掠奪しない。与へるだけのものは、必ず与へて吝でない。然も永久に、不変に、与へるだけのものは与へることを保障して居る。…（略）…沈黙にして然も私共に不断に何事かを教へ、無抵抗にして然も絶えず峻酷な制裁を与へて居る。私の農に帰らんとするは、此の土の与ふる教訓と制裁とに依って、心と生活との洗礼を受けんが為である。[18]」

帰農前の横田の農政論が、実に詳細なデータに基づき、抽象的、観念的になるのを防いでいたのであるが、それも所詮は資本主義経済のなかでの、「如何に持つべきか」という量的問題に終始したものでしかなく、人間の内面を剔抉するようなものではなかったことに彼は気付いたのであろう。

帰農して、平凡な一人の人間として、誠実に、真心を抱いて生きようとするこの世界に、横田は己の心的革命を予期したのである。西欧の近代的知の追求のなかに魂の救済はないと判断し、近代のはらむ病理を超克しようとしながら、ついに空想的理想を追い、ファナティックな結末を遂げざるをえなかった農本主義者は多い。横田と同じ頃、茨城県東茨城郡常盤村に帰農

した橘孝三郎もその一人である。彼は第一高等学校を中退し、世俗的出世志向と近代的知に訣別し、一人の平凡な人間として土のなかに己を埋めようとした。知を蹴って、大自然の温かき懐に抱かれ安心立命の境地を模索したのである[19]。

心情の次元において、横田と橘の間に大きな距離はない。横田は次の言辞をもって、「農に帰らんとして」の「個人的消息」の結末としている。

「私は最後に云ふ、私は自由ならんが為めに、故に正しき生活を営まんが為めに農に帰る。私は自然に帰らんが為めに、故に稚児の心を以て農に帰る。所謂現代文明生活の纏綿する一切の欠陥、一切の罪悪、一切の不安、一切の不純から脱却せんが為めに農に帰る。故に私の後半生は、唯、自然に対する忠実な奉仕と、生産に対する勤勉な努力を以て終るであらう。[20]」

資本主義的文明の背土的趨勢に、横田は、人間存在の悲哀を見る。土に背いて人間が幸福を獲得したこともなければ、国家が栄えたためしもない。土は厳然として人の前にある。そして多くの生命を宿し、育むと同時に人を強く拘束する。土に帰ることは、単なる文人たちの夢や唄で完結してはならない。このことが、まさしく、資本主義的文明の上に構築された人間社会の不幸の面を追求する根本的テーマであることを、横田は主張している。

四、中部日本農民組合

帰農の唄を唄い、それまでのあらゆるものを放棄し、土への埋没を決意した横田であったが、その土着の生活を世間は彼にそう長くは許さなかった。あれほど強固な信念の下に帰農を実現したにもかかわらず、その土の生活は、あっけなく終止符を打つこととなった。大正八年には、『福島日日新聞』にかかわり、再び評論の世界に舞い戻っている。さらに評論家としてとどまることなく、新潟県で、北日本農民組合の顧問となり、大正十三年には、彼の終焉の地となった岐阜県に赴き、中部日本農民組合の結成と同時にその組合長となる。

帰農以前に高唱していた「小作農」の問題を、「語る」ことから「実践」の世界に移していったのである。

わずか二年間という瞬時ではあったが、横田がこの岐阜の地で後世に遺したものは、農民組合運動の本質にかかわる極めて大きなものがあった。まず、次のよ

うな評価をあげておこう。

「中部日本農民組合の指導者横田英夫は、岐阜農民運動の発展における偉大な偶然性である。小作人組合の県連合が独立組合でいくか、日農県連として進むかが二つの可能性であったとき、これを独立組合として確立させた大きい要因は、確かに横田の存在であった。[21]」

当時、岐阜においては、日本農民組合（日農）に加盟し、全国組織の一支部として活動するか、それとも、その土地で単独の運動を進めるか、この両者をめぐって激しい論議が繰りひろげられていたが、ついに、横田を長において、独立組合で活動することを主張していた側が勝利することとなった。大正十三年四月、組合結成の運びとなった。この年の末における中部日本農民組合の実態は、支部数四十九、組合員数三千五百人弱というところであった。

この組合の「主義」、「綱領」、「宣言」には、次のような文言が見られ、その意気が高唱されている。

「〈主義〉　我等は尊皇愛国の大義を奉ず〈綱領〉一、我等は社会共存の理想に従ひ最も善良なる農民としてその天職を完うせんことを期す　二、我等は自治相愛の精神を養ひ共同の力にありて我等の地位の向上改善を図らんことを期す　三、我等は地主及小作人相互の無自覚のために惹起せらるゝ農村社会の不安を防遏し農業制度の合理化を期す　〈宣言〉　中部日本農民組合は、土地の上に労働する農民の精神的並に経済的結合により、その自助運動の機関として組織せられたるものにして、将来全日本的の最高権威となるべき約束を有する農民同盟なることを、まず宣言す…以下略。[22]」

とどのつまりが国家権力、天皇制国家と闘うことを余儀なくされる農民運動、農民組合が、「尊皇愛国の大義」を掲げるのもじつは奇異の感がするが、これを表看板にしているところに、横田らの独得の戦法がうかがえる。「尊皇愛国」を主義として、横田は次々と組合をつくり、運動を展開してゆくのである。横田が足を踏み入れるや否や組合が結成され、「小作農民」は嬉々として彼を迎え、地主たちは戦慄したといわれている。坂井由衛は、当時の模様を次のように伝えている。

「横田が一度講演したらかならず組合ができるという始末で、横田が村へくるときいただけで地主はふる

え上がり、小作人は神様のように随喜してかれを迎えた。思想の根本は農本主義で、農民運動の革命的展望を科学的にさし示すものでもなく、小作料の減免こそ小作人の生活を守る唯一の方法で、減免闘争はやがて全国に発展するであろうと教えただけだったが、たたかいに立ち上がろうとする農民の心をとらえた。(23)」

大正十三年の秋から冬にかけての横田の遊説の足跡をたどるだけでも次のようになる(24)。

十一月一日　稲葉郡鶉村東鶉組合総会
十一月五日　稲葉郡南長森切通組合総会
十一月六日　稲葉郡長良村講演会
十一月十八日　稲葉郡北長森村前一色組合総会
十一月十九日　稲葉郡三里村宇佐組合総会
十一月二十三日　鶉連合大会
十一月三十日　揖斐郡池田村上田講演会
十二月一日　揖斐郡富秋村稲富講演会
十二月一日　稲葉郡日置江村茶屋組講演会

それぞれの会場で、横田は長時間にわたって熱弁をふるい、参集した農民を共鳴させ、酔わしめた。横田はかつて、自著の『農村革命』で、「小作料低減運動」についてこうのべていたのである。

「飢えたる小作農民が行くべき道は、唯小作料低減運動あるのみ。吾人は近き将来に於て小作料低減運動が、吾国の農村に頻発継続さるべきことを予言して憚からず。(25)」

「小作料低減運動は最も悲愴なる社会運動なり。利益分配に関する地主と小作農民との階級闘争なり。(26)」

この著作での「小作料低減運動」に関する予見を、横田はこの地で現実のものとしたのであった。

中部日本農民組合にとって、初陣ともいうべき岐阜県稲葉郡鶉村での闘いにおいて、横田は組合をよく指導し、地主側の激しい対抗にも屈することなく、「込米廃止」、「小作料の二割引下げ」などの要求を貫徹した。この初陣に見せた横田の指導力は、その後の農民の団結と組合の闘争内容において、画期的意味を持つものであった。

中部日本農民組合の長である横田の風貌は、当時の闘士的なものからは想像出来ないものであったといわれている。この時の風貌と農民組合運動との関係は、それ自身が一つのテーマになり得るものかも知れな

い。坂井由衛は横田の当時の姿を此のように描いている。

「ずんぐりとした逞ましい面構えの和服の農民の中で彼だけが詰襟セルの洋服で背がづぬけて高かった。講演にゆくときはセルの詰襟服、家にいるときは大島絣の着流しで、背広服などは着たことがなかった。金縁眼鏡に痩身長駆、貴族的な風貌で農民組合の闘士という風彩とは程遠い格好をしていた。国粋会川口某の子分が抜き身の日本刀で脅迫したときなどもインテリめいた弱さなど少しも見せず、胆の据ったところをみせた。激しい情熱を胸に秘めながらあのもの静かな姿を今も忘れることが出来ない。(27)」

中部日本農民組合が、その基本的理念、つまり〈主義〉としていた「尊皇愛国」を横田は遵守する立場をとりつつ、農民の現実的利益を追った。これは社会主義的、共産主義的農民運動とは大きくかけ離れたところのものである。

横田の運動方針、戦術はよく耕作農民、なかにすぐ「小作農民」の心情を把握し、吸収していった。天皇制国家を強く支持しつつ、農民の日常的生活苦を軽減してゆくという手法、ここに横田の運動の特徴がある。反天皇制、反国家をスローガンとした激烈な階級闘争が、この時点で、どれほど「小作農民」の心情を把握し、運動の現実的成果をあげえたかということに関しては、極めて大きな疑問が残る。

資本主義の矛盾を指摘し、それを打破してゆくことを基本的方針とする社会主義革命路線に対し、横田は強い不快感を抱いている。

横田の思想は、あくまでも農本主義であり、闘争の場においても、それが揺らぐことはない。民衆の日常的生活意識と無関係の「高尚」な理論は、「知識人」の遊戯の場において存在すればよいと、彼はいわんばかりである。

農本主義の性格の一部に、本来の農民運動とは異質のものがあることはいうまでもない。土地制度の矛盾をはじめとする農村内部の諸々の軋轢を隠蔽し、村落共同体をして天皇制国家、中央集権国家形成、強化のための、春風駘蕩する非政治的空間に仕立ててゆくという機能を農本主義は持つ。しかし、リーダーの資質と状況如何によって、この農本主義は、ある限界内ではあるが、闘争の武器として有効性を発揮することがある。

一柳茂次の次の横田評価は、注目に位するものといえる。

「理論は単にその『完璧』によって階級闘争の武器となるのではない。自然成長的階級闘争を意識的な計画に従属させ、拡大させえたかどうか——理論の歴史的意義はこのように規定される。横田の理論をもってしては、日本農民を権力掌握に導くことはできないということは、横田の理論が大正初期岐阜農民運動の指導的頭脳を意味したことを否定しさるものではない。岐阜農民運動史に刻まれたこの歴史的事実は、何よりもマルクス主義と農民運動の結合に対する安易な予断に導かれた歴史分析に対してきびしい反省を要求する。(28)」

生理的欲求に基づく現実的利益の追求のエネルギーは、多くの場合、権力体制擁護の側に吸引されてゆく。官僚が耕作農民の「よき」理解者であったり、「力強い」援護者であったりすることは、なにも珍しいことではない。そして逆に農民の同情者、支援者だと大声で叫んでいる連中のなかに、実は農民の最大の敵がいることも合わせ考えておかねばならぬことである。

横田の手法が、いつ、いかなる場合でも成功するというものではない。しかし、そうだからといって、人間の深層心意を無視した「立派」な理論、思想がいかなる結末をとげるかも明らかなことである。

注

(1) 横田英夫『農村救済論』裳華房、大正三年、一三三頁。
(2) 横田英夫「農村革命論」、大正三年〈明治大正農政経済名著集⑫〉所収、農山漁村文化協会、昭和五十二年、一四六頁。
(3) 横田『農村救済論』、三四頁。
(4) 同上書、四三頁。
(5) 横井時敬は農業と商工業、農村と都市を次のように比較している。「農業はワシントンの言へる如く最も尊貴にして且つ最も有益であり健康なものである。金に憧れず土と親しみ大自然を友とし、無欲にして汚き人を相手とせず、不羈独立正に天国の如きである。…（略）…商工業は金銭以外には何物もない、都会のみ発達せんか、その国家社会は甚だ危険といはねばならぬ、都会の欠陥を補ひ以て国家を安泰ならしむるものは農である。」（大日本農会編『横井博士全集』第九巻、横井全集刊行会、昭和二年、一七頁。）
(6) 横田「農村革命論」、前掲書、三八頁。
(7) 「東北虐待論」は「東京朝日新聞」における十日間にわたる連載であったが、その最初の日（明治四十四年八月十五日）、彼はこうのべている。「凡百の東北振興論は、悉く誠意を欠き

若くは適切を欠き可能力を欠く、梢誠意ありと認むるものは所論迂禺俄に之れを操るべからず、往々に凱切の言を吐くものは途上一過の人々にして誠意なし、挙げ来れば東北振興策なるもの東北人が以て依頼し傾倒するに足るものあらざるなり、余は東北振興論を検する毎に、東北の為めに同情するが如き口吻を洩らす当局者及び識者が、唯勤勉なれ東北人は懶惰なりとか或は貧富問題に言及して、貯金思想に乏しかと言ふに止まり。」

(8) 横田「農村革命論」、前掲書、六七頁。

(9) 同上書、八八頁。

(10) 同上書、九〇頁。

(11) 同上書、一四六頁。

(12) 同上書、一三三頁。

(13) 同上書、一三四頁。

(14) 横田「農に帰らんとして」『読売新聞』、大正六年八月十二日。

(15) 同上紙、大正六年八月十五日。

(16) 同上紙、大正六年八月三十日。

(17) 同上。

(18) 同上紙、大正六年九月二日。

(19) 橘孝三郎が第一高等学校を中退して帰農したのは大正四年三月であるが、大正二年十一月に校友会誌上で次のような発言をしている。ここにはすでに帰農の前兆が読み取れる。
「私等は法律家とか、政治家とか云う色々な型を作って、その中へ自らを打ち込んだ狭い空虚な生活を捨て、又古びた因襲――私等に何の力も与えない――に縋り付いて行く、浅薄な生活を捨てて、一人の自覚した人間として、青年として生きなければならん。自らの微少なる事を痛感して総ての誇張を去って、日一日を真実に生きなければならない。」(「真面目に生き様とする心」、一高校友会誌、大正二年十一月、『土とま心』第一巻第一号所収、橘学会、昭和四十八年八月、五〇頁。)

(20) 横田、前掲紙、大正六年九月五日。

(21) 一柳茂次「岐阜県農民運動史」、農民運動史研究会編『日本農民運動史』東洋経済新報社、昭和三十六年、七一四頁。

(22) 同上書、六九九頁。

(23) 坂井由衛『岐阜県労農運動思い出話』坂井由衛遺稿集刊行会、昭和四十五年、二一頁。

(24) 一柳茂次「岐阜県農民運動史」、前掲書、参照。

(25) 横田「農村革命論」、前掲書、一二二頁。

(26) 同上書、一二七頁。

(27) 坂井、前掲書、一一〇頁。

(28) 一柳茂次「岐阜県農民運動史」、前掲書、七一七頁。

主要参考・引用文献

横田英夫「東北虐待論」『東京朝日新聞』、明治四十四年八月十五日～同年八月二十四日。

横田英夫『農村救済論』裳華房、大正三年。

横田英夫「農に帰らんとして」『読売新聞』大正六年七月十七日～同年十一月十三日。

横田英夫『農村問題の解決』白水社、大正七年。

横田英夫『農民の声を聞け』日本評論社、大正九年。

横田英夫『現下の農民運動』同人社書店、大正十年。
横田英夫『小作問題の研究』巌松堂書店、大正十一年。
桜井武雄『日本農本主義』白揚社、昭和十年。
橘孝三郎『皇道国家農本建国論』建設社、昭和十年。
一柳茂次『岐阜農民運動史——とくに中部日本農民組合を中心とする』〈農民運動史研究資料・第五集〉、農民運動史研究会、昭和三十年。
一柳茂次「農民の組織化——『反地主』の場合と『反独占』の場合とを対比させつつ—」、『思想』昭和三十四年六月。
武内哲夫「農本主義と中農中産層——明治後期・大正期を対象とした一考察——」『島根大学研究報告』第八号、昭和三十五年。
農民運動史研究会編『日本農民運動史』東洋経済新報社、昭和三十六年。
坂井好郎「日本地主制と農本主義」『経済論叢』第八十八巻第五号、昭和三十六年。
山本堯「農本主義思想史上における横田英夫」『岐阜大学教養部研究報告』第四号、昭和四十三年。
谷川健一、鶴見俊輔、村上一郎編『支配者とその影』〈ドキュメント日本人(4)〉、学芸書林、昭和四十四年。
坂井由衛『岐阜県労農運動思い出話』、坂井由衛遺稿集刊行会、昭和四十五年。
橘孝三郎「真面目に生き様とする心」『土とま心』第一巻第一号、橘学会、昭和四十八年。
横田英夫『農村革命論・農村救済論』〈明治大正農政経済名著集(12)〉、農付漁村文化協会、昭和五十二年。
武田共治『日本農本主義の構造』創風社、平成十一年。

Preliminary Survey at YOKOTA Hideo